

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 松浦 和也

松浦和也氏の論文「アリストテレスの時空論 — 『自然学』第3巻第4巻の構造と存在論的前提 —」は、古代ギリシアの代表的な哲学者の一人であるアリストテレスの、自然哲学という領域において最も影響力のある『自然学』に焦点を当てて、その第3巻と第4巻において展開されるきわめてユニークな運動論を、アリストテレスの時間空間論の読解と連携させながら、綿密な再構成を行う試みである。アリストテレスは、運動を「可能態にあるものの、そのようなものとしての、エンテレケイア」と定義するが、本論文は、この謎のような定義に正面から立ち向かい、詳細な整理と吟味を施し、一定の描像をえぐり出そうとする労作である。

松浦氏は、まず第1章において、上に記した運動の定義そのものを検討する。そこで問題となるのは、「可能態」と「エンテレケイア」の概念である。松浦氏は、「エンテレケイア」が現実化と解された場合に循環が発生してしまうのではないかという近年の論争状況を跡づけながら、「エンテレケイア」は「現実態」と解すべきことを縷々論じる。加えて、「そのようなものとして」という部分を、「その対象が可能的にXであるものとしての」と解すべきことを、詳細なテキスト解釈によって提案する。それを承けて第2章では、運動の定義が明らかに空間的延長を含意する点から、場所論・空間論に進むべく、まずアリストテレスの無限論の検討を行う。松浦氏の解釈のポイントは、アリストテレスにおいて無限大は否定され、分割無限は肯定されるが、その両論点の根底には、現実態と可能態の間の連続性の確保があるのであり、それが運動論へとリンクしていく、という理解にある。続いて第3章において松浦氏は、いよいよ場所論・空間論の検討に進む。松浦氏は、「包むものの第一の限界」というアリストテレスの場所の定義をめぐる理論的問題を跡づけながら、アリストテレスが、場所を、物体に固有の場所として解していたこと、しかしその物体の外部にある不動の物体との接触によって物体の移動がはじめて理解されること、それらを主張する。次の第4章で松浦氏は、場所論の対極をなす空虚論を俎上に上げ、アリストテレスの空虚否定論の意義を解明する。氏によれば、アリストテレスの空虚否定論の根底には、感覚的パノメナを重視する態度と、「同じところには二つ以上の物体は存在しない」という排他性を含む物体観がある、と喝破する。最後に第5章において、松浦氏は時間論を取り上げ、アリストテレスにおいて、時間はあくまでも運動を基底として、「運動に関する前後の数」として派生的に解すべきであり、その視点から「今」の概念も解明されるべきだと、結ばれる。全体として、アリストテレスの時間空間論が、徹底的にいえば運動基底的に展開されているという様態が露わとされるに至る。

無限論が数や時間に関してどう適用されるかがやや掘り下げ不足の観はあったが、大変に込み入った主題に対して、テキストに厳格に沿いつつ、首尾一貫した独自の読み込み方をしており、アリストテレス研究に一石を投じる研究である。博士(文学)の学位に値すると判断する。